啓蒙養生訓

五

ヤ津10
222
4

和装本

和
406
4

東京帝國學校圖書

藏書

啓蒙養性訓卷之五

明治廿三年八月十八日 醍醐 寄贈

土岐頼徳 纂輯

神經系の部

總論

津 10
門 222
號
巻 4

神經系とハ神經の一連系と云ふことなり脳髓
脊髓神經などいふ諸形器を合をいふなり
脳髓とハ頭蓋骨の中ふありてその轉廻
疊束せる狀宛も鳥の腸の如一色ハ白き部なり

青松軒蔵

灰色の部あり大き體中至重の形器ゆゑ精神の府とも唱ふる程あれば國ゆゑ大へ都人間ゆて云へば帝とも云ふべき重きものあり總て體中百器その數多しと雖も皆腦の命令を受て各その官能をあらためあり腦の本職も智慧才覺を出して種々の事を主宰ひ物を考へるも事を記憶るも寒熱痛痒を判斷するも一切此器よて整理するあり

脊髓（せきずい）は腦（のう）の下方ゆ延下りるものともいふべ

しその形へ一條の長き帶の如しこれまた白部あり灰色の部あり周圍へ脊骨ゆて堅固ゆ圍擁めばその質柔うあれども容易く損ずることゆしその職へ體外より来る感を腦ゆ報らき腦の指令を受て脉外の諸部ゆ知らせちとを主どる譬バ手ゆ火を附れバ忽ちその熱を脊髓神經ゆて電信機の如く脊髓より報らせ脊髓より腦ゆ報らを腦ゆて熱と云ふちとを判斷して之を脊髓より脊髓神經より傳へ手ゆ熱きと云ふことを知

らせて之を運動させが如し」その他呼吸消食機血液循行あどを主どるあり

〔神經〕ハ色白くして紐の様あるものあり脳より支分るもの十二對脊髓より分泒るもの三十對

脳より支分るものハ皆眼耳鼻舌皮膚あど

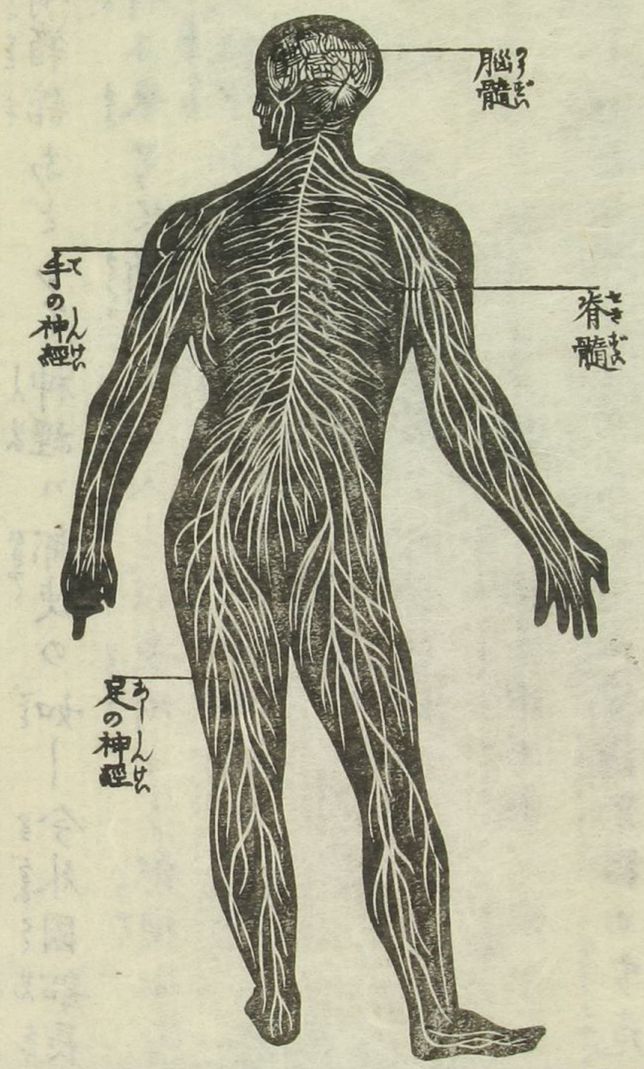
ホ布滞りてその部の運動感覺を主どるあり譬バ眼ホ物影映れバ眼の神經之を脳ホ報らせ脳ホて此ハ美し又ハ醜しと判斷し直ホ之を眼ヨ知らせて美しき醜きと去ふ感を起さしめ耳ホ

音響聞ちとバ耳の神經之を脳ホ報らせ脳ホて此ハ美音又ハ悪響ありと判斷し直ホ之を耳ヨ知らせて美音悪響といふ感を起さしむ鼻の香臭を嗅ぎ舌の食味を辨る所以も此と同じかあり但し耳の音を聽き眼の物を視鼻の香を嗅ぎ舌の味を辨るを特官といふて知覺と異あり知覺とハ寒熱痛痒を受て此ハ寒し此ハ熱しホど判斷するものホて脳神經ホも脊髓神經ホもなる感覺あれバ頭手足ヨ拘りらバ何の部に

も發さども特官い腦神經の中眼耳鼻舌ふ循さ
るものゝみふ限さゞ他の部ふい決してあきも
のあり」脊髓より分泒るものい手足内臓皮膚ふ
どふ分布りてその部の運動感覺を主どる乃ち
心臓の鼓動肺臓の橐籥胃腸の蠕動血脉の搏動
ゝど皆その所管ふり」さて神經い斯く遠隔の諸
部ふ受くる體外の百事を腦ふ報せ腦の判斷を
受て又遠隔の諸部ふその應接をする法を知らせ
るものふていけゞ郵使の職あり近く譬ゞ腦を

大政官眼耳又い皮膚ゝどの如き遠隔の部い長
崎箱館ゝど ゝて神經い郵使の如く今外國船長
崎ふ来りて斯々と云入さば長崎より郵使ふて
大政官ふ報せ大政官ふてその可否を判斷され
い郵使還りて直ふ斯々と應接して事體を主理
ゞ如く次の圖解を看て大畧を悟るべし○全身
中の諸形器多くと雖も一切皆腦脊髓の使令を
受て機能をあらはすものあれゞ必竟諸形器の安危
ら腦脊髓の安危ふ從て来るものゝ養生

全身の神經の圖



の法を究るハ尤重要なるあとあり
腦の機能強健なるもふたゝび初生期より
之を保護るべき事
嬰兒の腦分娩の時より缺損あり繼て兒童の際
傷害を受ぐ後年容易く疾病ふ侵されど
も天稟腦の缺損なるハ又た小兒の際養生よ
らずして病狀なるものハ至て病ふ罹り易し○
癇症の原由の中わも最第一ハ遺傳ありそれ
ハ兩親とも癇症の遺傳なるとなハ一親の癇症

青松學舍藏

の遺傳のふりそその子の癇症甚しあれ冨人も貧人より重縁の多きものあれば亦癇症の多き所以なり歐洲の中西班牙國ハ重縁を結ぶこと多き國あれば癇症家多く出来て祖先ハさしも賢明人々なりしに子孫ハ瀰癡人愚夫のみ澤山とあれり又米國の海島人ハ狂人あど多きも全く重縁の多きゆへ斯く惡病の性ある重縁多きと知ハ瀰惡病を子孫ハ累き益害を後世ハ殘すものあれバとくく注意て子孫ハ害を殘さざる樣ハかべし

腦ハ清血の必要ある事

腦ハ至て貴重の器あれバ他部ハりハ血液の灌注ハ至て多きものありそれ由へ若腦ハ灌注む動脈血全く止るゝ又ハ炭酸を吸引てその血液汚るゝと知ハその官能廢滅り恍然して感覺を失ふあり譬バ大創あどを受て多量ハ血液を失ふと知ハ眩暈氣急を發をものあり是腦中ハ十分血液の灌注ざると或ハその官能をあし

得ざる證據あり又世ふ毒井あゞ〳〵稱へて人その中ふ入るとき氣絶して死するとい

とゝり是井底ふ炭酸のりてその中ふ入る人ふ吸引らてその血液汚さゞあり○その他微少ふても血液ふ變常ゝれゞ亦害をふぼめありされゞ汚氣を吸引むとき血液を汚して腦ふ害を及し倦怠頭

痛鬱神あゞを發をあり大勢寺宇又い講席あゞふ集り久坐ときい頭痛逆上あゞを發し風通よき寺や講席ふていい午後ふあるとも人の困倦睡眠ふと少きい此理合あり」ふれを以て考るとき汚血腦中ふ灌注めゞ癇症の原因とあるめゝ日常注意て不淨空氣を吸引ぬ樣ふをぐし

腦を日常使ふべき事

腦も亦筋肉あゞく同じふと雖て一回い勞動き一回い安靜るい自然の道理あり由へふ適度の

務をあ〜て適宜ふ脳を用へべその容長大あり
てカも強く精神活潑とゝるものあて怠りて用
いざれいその機能弱くあり之ふ従て全身諸部
の機轉も衰つ且脳の容縮ふて才智ふども皆鈍
くあるありさりとて餘りそれを勞役ふて度ふ過
るときい恐るべき病の原因とあれば注意べき
ものあり○脳を用いぞ〜て癇症を發せい殊婦
人ふ多〜婦人い多〜〜活計ふ心を關ぜ總て才智
を錬熟べき諸件ふ管らぬものあるべ竟ふい精

神怠て天稟の才智を失ふのみあらず微少のふ
とあも歎き悲ミ身神の病を發し易くあるもの
ありされども斯る婦人もその習慣を變るとゝ
い自然と沼るものあり譬ば今すで田舎の閑静
ある處ふ住そる人ル市衢の忙閙地ふ移して種
々ふ指役ひ又交際をさをそのの才智を磨りて
ま〜ば自然と脳も強健とありて二月三月経ばて
の初と變ることを實ふ驚くべきあり○又今すで
非常て繁務ふ日を送り居る人の年老て休退を

んとて閑静なる地ふ退隠て種々精神を活動ら
し才智を錬磨べき事業を廢棄ると紀い終ふて
の脳衰弱りて各種の癇症を發をものあり
脳を過度ふ勞役ひ又ち定期ふく苦使をと
きい險惡病を發を事
今若し餘り久しく光輝を見るら又い餘り明き
光輝を見るとさいちの眼潑紅て血脈も神經も
共ふ機能を増し疲て痛を發をものあり此時眼
を休をバ又平康の態ふ還をども若し凝視て息

ず又い少焉休むとも未平康の態ふ還らぬうち
再之を用ふとき紀い終ふ病状とありて視力迄弱
又い盲目あどふある事り」脳もたまと異ことふ
し甚しく精神を感動をとさいその血行自然と
迅まりて終ふい脳中ふ鬱積ものあり之ものの
状の外より見難きのみされども「ものをとりいた
つぱる」と云ふ人一少年の頭ふ創を受けてその
治療をあをし際ふ見ふる様と何人も皆同じた
となり扨此創せし少年と云ふい宛眉毛の上邊

の骨碎去りてよく外より腦中の見られる樣ふなりしが平生い血行徐して穩あれども若し意ふ違ふことありて精神を感動せとれいその血行迅まりて搏脈築動あれりと云へり」されば眼を劇しく使ふとれい光輝を受るも一向物を見るちとのあるぬ樣ふあると同く腦も餘り使ふて虛脫とれい考案も出來ぬ才智もあくあり終ふい精神も錯亂るあり殊兒童の頃い腦も未ざ十分發育ぜして柔軟あれば過度ふ役ふい宜し

くくぜ世ふ癧癧性又ち佝僂性の小兒とてその狀頭顱大く身體小くして才智の早く發生りの是病狀ふて斯る狀とあるものゆへよくく保護るとも初年らういや劇しき腦病を受るものあり然るふ愚ある父母い斯く早く智發を此病の常徵といい知らざるゆへ却て此ふ心を感し彌藝術を習錬て名譽を顯させむと欲ひ讀書とあど種々ふ精神を勞役せるものなり」されども斯く逐日才智の發達樣ふ見ゆるふ從て父母の

希望ハ亡去るものあり何と云ふ斯く早まりて脳を勞役らせ過て衰耗て病状とあり後ふたち智力衰へて愚蒙ふなり終ふハ先の烏ゞ後ふあるの譬の如く同群兒輩の最劣るものとあれば なり故ふ斯る性の小兒ハ餘り早くより精神を勞役せたと戒止めてなるべく身體を保護すべきたとあり」そのうへ箇様ふ小兒を早くより學校あるどふ入るべきとさい二般の損あり一ハそのオ能群兒より發達せるゆへ他人の偏執を受ると

一ハ終ふ病状とあり愚蒙ふ陥るとあり○總て少年の疾病ハ多く學校ふて久しく勉勵り長く精神を勞役すり起るものあれば教師あどハよくく心を用ひ時々の放課を定めて開濶なる氣の中ふ逍遥をあさしむべし現今開化の日ふ方り爭ふて過度ふ勉強をあ一足飛ふ大家ふあらんとするとも人々の才器ふ定限のあるたとあるをば強ち一頓ふ切迫て酷苦しくとて非常ふ出来るものふ非ず却て一回ハ勉強り一回ら

安静むさを漸々と成立て根強きものなれども
〳〵一動一静の天理ふ逆ふさとあられ○除り脳
を勞ふて之を安静めざ
るとたゝその血の行り
休まるとさあらさるもの
と免ふ不症鬱憂ふど種
々の癇症起り漸々そのの
病徴重りて消化機し衰
へ栄養も障げらも憂悶

の心止ときふ〳〵終ふら
自害ふどを企るふ至る
實ふ傷しきさとあらぞ
や○殊更老人ハ少年又
ハ中年ちりも過度の心
勞をあたゞうゝばそ若き
間ハ過度ふ勞役をするも
亦回復るとのもども老人ハ疲勞るとも早く又
決しく回復り難けきがあり○總て一念を凝し

て物をするときい過度ふ精神を勞役ひ易し此理合ふて學者詩人測量家あどふい癇症を患ひの多くして生涯の痴凱又い狂人あどくあるといのり恐るづし慎むづし○却説段々精神の患惰と過勞とより起る疾病のあとを説示しくを次ふい腦の用法を論をづし

食時の前後い直ふ甚しき心勞又を精神感動の害あふ事

元身體と精神とい一躰ふして離るづあらざるも

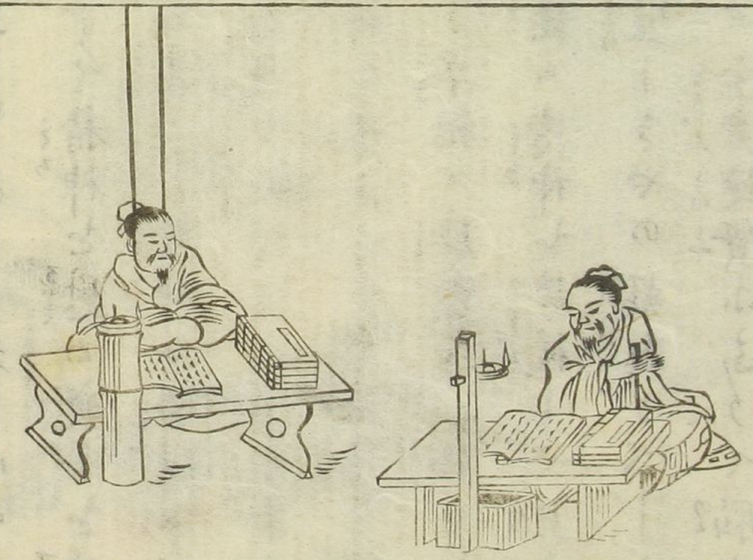
のあれい十分健全の人ともい食後直ふ親戚朋友あどの来しくを聞り卒然心勞をあれときい胃中ふ食物の停こるものあり」ろく腦と胃と一どふ甚しく煩勞をるとれい互ひ官能を相妨て險悪癇症と不消化病とを起にものふて學者あどい能く此症ふろう易きものあるべくく注意べきあり

學文勉強い一晝夜の初際ひもげしくあれべき事

造化自然ハ晝夜を立て晝作夜静の設をなせば
晩方甚しくのうを勞ふときハ一田操擾する精神
人〳〵をして安静ならしム神經質家あれバ床
ハ入るも久しく眠り
うハ不快夢あど
ハ驚さまし〳〵ものあり」
されバ早朝より日中
前後までハ劇しく精
神を勞役ふて瞬前三

四字の間ハ談話、絃唱あどをこのしミ又ハ心ハ叶
さる詩文あどを朗吟じて精神を慰め疲勞を休
むべしいくさきが初め甚しく精神を勞役する
とハ脳中ハ發りさる血液の操擾もよく安静り
て快眠るあり特て精神を勞ふものハ此法を確
く守るべし○さてまた早朝ハ肢體を勞動さハ
最上の時あれバこの時間ハ精神を勞役して宜し
きや筋力を勞動して宜しきやの疑起るべしさ
べて肢躰を勞動らせバ全身健質ハありて脳も

自然と活潑とあるものゝ反なるとさゝ肢體弱り脳も衰るものゝあれゝ早朝ゝ學文をふ最上の時あれども少間ゝ肢體を勞動うせぞゝ宜しからゞゝへゝ先早起して一回適宜の運



動をあゝ次ふ一日の定課を正〻く務むゞ朝ゝ晏起て夜を深更まで勉強るゝ至て〻〻支那の蘇秦と士ふ人ゝ學問するとき眠くあるを憂ひ股ふ錐を刺〻又孫敬ら梁より繩を下て頭ふうけあとして勉め學び学りといつりされ等ゝ第一大理ふも背きその上養生ふゝ極々悪〻

脳を勞ふゞき時間の事

凡て脳力の勞役ふ堪つるゝ各人ふ就て同じからゞ斯いちの本質發育年齢習慣あゞ種々の古

トハ云ヒトリテ一様ニ教ヘルモノアレバ萬人ニ適當
スベキ一定ノ法トテハアキラカニアリ」先大器ノ
愚ニシテ五歳ヨリ二十歳マデノ書童ノ學課ニ宜
シキ時間ハ最年長ジルモノハ一課ヲ勉ムル間
ヲ三字ヨリ一字毎ニ各十分字ノ憩息ヲ立テ中
間ノモノハ課業二字ヨリ憩息二十分字。極少年ハ
課業一字ニ憩息十分字トシ去ラバ能ク筋力勞
動ニ慣ラシ人ハ久シク勞動ニ堪ヘルト同ジヲ
以テ精神ヲ勞役ヒアレジル人ハ長ク勞役セル

モ疲ルヽモノアリ」晩年ニ學文ヲ初ル人ハ毎
日十二字以上ヲ書ヲ讀續ケル人アレドモ斯ル
無理ヲスルトキハ忽チ身躰モ精神モ疲レ
果テ其ノ進歩忽チ止ムモノアリ少ノ人ハ
先初ハ三四字ノ間剰シク勉強シテ毎日五分字
位ヲ其ノ時間ヲ延長シ脳力ノヨク堪ルニ従
テ八字許トナルニ至ルベシ」又凡テ精力ハ大ニ
全身ノ模様ニ由ルモノニシテ全身健康ニシテ
ベ精力モ弱シ殊消化器ト脳トハ至テ親シキモ

のあり俗説ハ虚弱人い恰學文さをふよりあゞと云ふい大ふ了簡違ひて簡様の人い日々開豁なる氣中ハ勞動きて疾病を拂ひ強健ふある様ふなるたて當然あれ

脳い規定よく勞ふべき事

毎日種々ふ精神を勞役ふとさ譬ば史を讀ミ筭を習ひ地誌を學ぶゞ如き毎常確と字限を定て勉るとさい至て宜しくして又時を定て同じゝを反復をい神經の質ふ甚ゞ適合ちとなり譬ば

毎日早朝ハ史を讀ミ午前を筭を習ひ午後ハ地誌を學ぶと云ふ様ふ日常變らず勉るとさい終ふハ此ふ慣てその時刻ふあれば忘已之を勉て一向苦勞ふ思ハぬ様ふなるものの卒然ふ出来ぬる事をもるより甚ゞ易し若し困難き學文をあせバその次を平易き業をあてべし一時強く脳を勞ふも轉て平易き業をあてとれい之ふて大ふその力を和げ彼の一動一靜の道理ふして脳力を強もるあり○脳力の沈鬱しるとと

きハ劇しき學文ハ出来難し又久しく才力を勞ひし際ハ繁冗なる考按のあり難きも全く理ふり斯るときハ斷然と休静なく脳力の回復を待つべし其理合ふく書童の甚しく勉強する後ふハ測量學の題の考へ難きも能く窮て後速ふ氷釋て之を考出したる夢あとを見ることなり

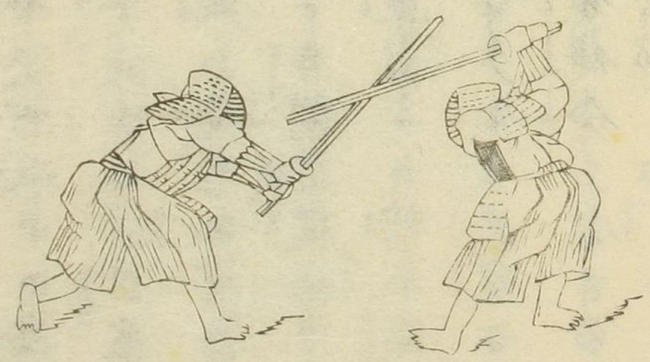
脳を一定字間ふ全力を一事ふ用うゞく又事物を錬熟むふハ回復を必要とする事一時ふ二三の事を勉ずハ何も全力を入ること

ハ出来ぬものなり脳ハいく數條の細件を整理と雖も若しその事体困難して持ふ考ざれへふり難き様のなとふ違へハ他事忽ち迂闊ふなる譬ハ談しながら歩くとき歩くことの急なれハ談中絶し或ハ忽止むと同じなとなり○又才力を錬熟むふハ幾回も能く回復なくハ是總て運動く伎を習錬せハその

伎の長るゝと同じ理合あり舞跳擊劍騎馬などを久しく習錬らく筋力十分ふ神速あり整齊運轉さとのあるまで熟るとゝ紀へ終ふ先生家とあり その後いよ〳〵久遠を熟達て毎々多〻酷苦ざるを一向妨あしきとゝども之を不斷習錬さば〻して一發一息て定限あきとゝ雖へ一向進歩の見へぬこゝのあり」寸力を習錬ども之と異あることあし故ふ算を習ひて斷ず六月も精神を凝せば一年又ら一年半の間一發一息て學るより大ニ熟

達るこゝのあり世ふ學文あゞを初め暫く勉めて怠屈し且後日ふ大勉強しく償むあゞく因循のたゝを去ふこゝのあるゝども斯り疲勞のこゝ多くして獲る所ら大ふ減却ものあり

腦力の健全あらむ



ふら睡眠の必要ある事

前ふも段々云つる如く萬物勞役ハ次ふい安靜むづきものゝ中終日才智を勞役すれバ自然と腦の疲勞るものゝあれバ眠て之を安息めぞい宜しからバ唯之だゝりゆゑ能く日間勞役せて疲勞を復をあり睡眠の腦ふ重要あるい猶不油い燈火ふ必要あるゞ如し何人なりとも適宜ふ睡り得ざるゝとゝい老年まで十分健全あるものゝあゝ彼の早く學文して名譽權勢を得むとする書生又ハ巨萬の素封を致むと欲ふ人ハ役々として分陰をも愛惜て安眠もあれたゝと能ハぞ斯る人ハ造物主の犯法人とも云ふべきものふて早晩その罪科を受て險悪病ふ陥るものあり既ふ歐洲の狂病院ふて段々驗せしもの病の本因ハ不寐ふゝりと云つり睡眠ハ躰中諸形器の自然と安息るべきとさあれば精神を勞役をたと彌多けれバ益眠て息むべき道理あり也つふ勉強生ハ怠惰生より多く眠るべき理合あり又

小児ハ躰中諸器の平康の官能を持續くるゝ
りてあくとその他まゝとその生育を營為ごき重大
の要務ありて別段ふ過多の疲勞を發すゝのふ
ゝ勿論眠りて疲勞を安息る時間も自然と大
人よりハ長くあくゞ宜しくゝらゞゝよくく此理ふ
注意をゞ終ふハ疾病を發をゝりさハいく餘り
過度の睡眠ハ神身の本方の官能を妨ぐるゝの
あれゞ至てゝのくく
頭蓋骨ハ微少の衝撞ふも破裂易き事

頭蓋骨の中ゝ殊耳の上前の部ハその質至て
薄くくて脆ゝれゞ頭側を衝撞るときハすく破
裂易きものあり教師父
母ゝどの児童を呵責と
き変して頭首を打ごゝ
らゞ或る學校の先生怒
てその弟子の頭を打ち
しふまで強くハあら
ざりしゞ頭蓋骨破裂て

腦の血脈破れて暈倒して終に死に至ることあり又兒童どゝ爭鬪して折合あどい實に危きことあり

衝撞又い劇しく人を震回せゞ腦を撞挫く事

腦もその質柔なるものなれゞ頭骨の外部より衝撞を受けその震動ありて撞挫うれ眩暈氣絶ふど起し次で頭痛健忘あど劇しき病を發をあり又劇しく身體を振回をときも斯ることを起をりのあるよりいのふちとあて兒童を呵りその手を掴うて劇しく振回をあどい至て危きことあり突してあれゞうらゞ少し高處より轉落又ゝ車上より飛下るとき不快感覺をありて眩暈をるい毎常いるをあて亦少しく腦を撞挫くふ由るものあり○總て斯る腦の損傷いるときいての症至て險惡ものあて人々の心得置くべきことありその症い總て感覺失あり手足變青て厥冷り脉搏軟弱ありて呼吸も甚ざ弱くあるなり

此時い患者を清き氣の中ふ安放き乾きて温ふる「ふられる」あどあゝ手足皮膚を摩擦りその色と温と發生て心臓と動脈の搏動の復故るまでよゝ注意て介抱をべし朋友きりとも周圍ふ集るときい空氣を汚さぬものあれば之を追拂ひ猶豫ふゝ外科醫を請び迎ふべし

五官の部

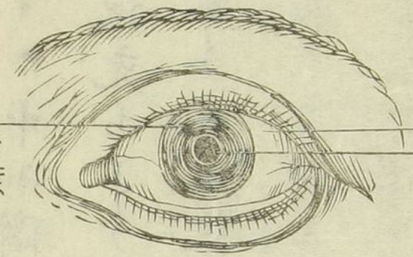
總論

五官といふ五條の官能といふ義ふゝ眼の物を視耳の音を聽き鼻の香を嗅ぎ舌の味を辨け皮膚の寒熱痛痒硬軟あどを觸覺る官能をいふあり却説ちの諸器の造構形状あどい何ども甚ざ錯雜て初學ふ解り難ゝれば今唯眼球の大畧を圖解して餘い之を畧ぐ此諸器の中ふて眼ゝ尤日常の勞役も多くまゝ外部よりて種々外事ふ應接ふものあればよゝ注意て養生もべし又他器も眼の養生の法の例ふゝ保護ると成いよく患害を防ぐものあり眼い顔面の上邊ふ雙懸

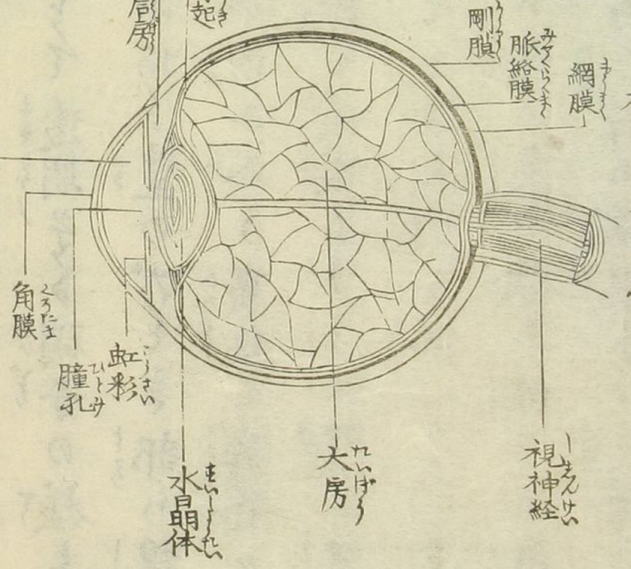
りて宛も二面の鏡の如しその周圍ハ三枚の膜
ふてあるたまを剛膜脉絡膜網膜と云ふ剛膜の
前の方ハ透明りて光輝の入来る部ありこれを
角膜と云ふその後を前房と云ふその中ハ水の
りその後の孔を瞳孔と云ふ光輝の入来る道ふ
り此孔の周圍を虹彩と云ふその後を後房と云
ふ亦その中ハ水のりその後ハ扁圓体のりされ
を水晶躰と云ふたまも光輝の透る道あり水晶
躰の周圍ハ車輻の様あるもの圍擁列ざりたま

を毛様起と云ふそれより後を一體ハ大房と云
ふその中ハ硝子液とて透明さる硝子の様ある
水液充ちり極後ハのる莖のごとき部い視神
經あり此神經眼球の内ハ入り廣延て薄膜とふ
り視たとを主どる即ち網膜あり左ハ掲る甲乙
丙の三の圖を参看てその大概を知べし○さて
眼のよく物を見るい物の象の眼ハ映るハ由る
物の象の眼ハ映るとも光輝の機能あり光輝ハ本
来光線とて考もつりぬるど細き線あり此細き

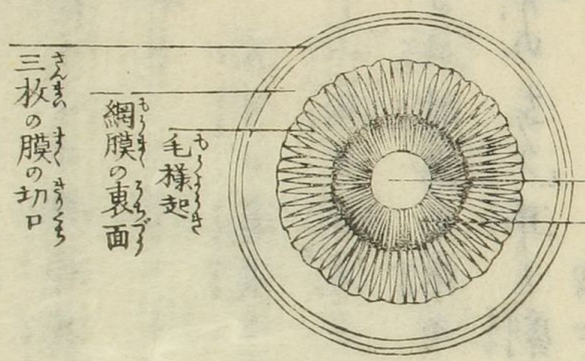
甲の圖
外より見たる狀



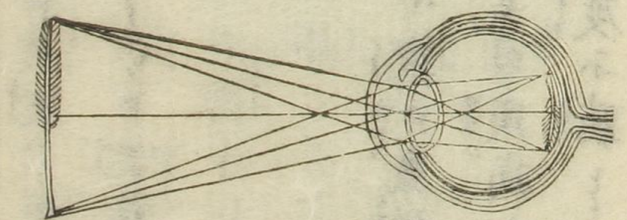
乙の圖
眼球の縱割を横より見たる狀



丙の圖
眼球の横截を后より見たる狀



丁の圖
物の象眼に映る狀



線數ゝざりもあゝ大陽又ゝ燭火より来りて物
ゝ射りその光線反射りて眼ゝ入ることゝ丁の圖
の如し

五官ゝ適度ゝ勞役づき事

若し一物を凝視ることゝ眼疲れて視力衰弱く
ある此時あゝ休めざれば終ゝ種々の疾病を起
すものあり」耳も劇しき音響を過度ゝ聽ときゝ
聾となりその他五官ゝ何れも一回箇様の患ゝ
逢つゝ至て治り難きものあれば適宜ゝ勞ふて

分を過ごすべし殊ゝ眼力弱くして眼病ゝ罹
り易き性の人ゝ日常眼を大切ゝして餘り劇し
く勞ふことなかれ

明き暗きの急ゝ變るゝ害ゝの事

總て五官ゝ何れもその感覺を急ゝ變ずべ
き譬ゝ今まで静ゝして居る人劇ゝ噪しき音響
を聽ふどゝ甚だ宜しうべし特ゝ眼の明き暗き
の景況急ゝ變るゝどゝ至て甚だ光輝の
眼の中ゝ入るゝその強弱ゝ從ひ虹彩とて瞳孔

青山堂合藏

の周圍ハ一つの圓環自然と伸縮をあ〳〵て明るければ瞳孔を縮め暗けきばされを開大げ恰好瞳孔の大小を整つるあり

されどもその伸縮ハ一瞬ハできぬ〳〵徐々とあるものあれど明處より急ハ暗處ハ至るとたゝハ没入る様ハ覺へ又暗處より劇〳〵光輝き處ハ

ハ中〳〵ときハ十分ハ視へ難し斯るハとを毎々あるときハ大ハ虹彩ハ害をあるものあり又劇〳〵き光ハ向ひて久し〳〵眼を用ふときハ網膜と眼球の裏面を包める膜麻痺れて物を視るハとのできぬ病を發をあり

物を視るとき久し〳〵眼を枉斜ハもぐうらざる事

物を視るとき久し〳〵眼を斜ハもぐるとときハ眼の運轉を主どる筋を甚く牽縮まりて終ハハ斜視

眼とあるものあり一時斜視眼を偽まるさくも甚だあしく

小児ハ日常遠近の諸物ハ眼を用ふ様ハ慣そぐき事

筋肉の非常の機動を屢續ると紀いその部の狀態を變らしむ譬バ手戟久しき間曲るときハ一方の筋ハ弛みて長く一方の筋ハ短くあり收縮力も増せど如く眼も亦ものと異ることあり物を甚だ眼ハ近けて視るときハ毛様起とて虹彩の後ハあるを之を周匝く物の中の筋質機轉てその後ハ行る水晶體を恰好く整へて光輝を受しむ又遠き物を見るときハこの毛様起種々ハ機動きて色々ハ水晶躰を機動りて適度をるあり」然るハ一週又ハ一月の間も近き物ばかり視習るハ又ハ遠き物ばかり視慣るときハその習慣終ハ平素とある學者時辰儀匠などのやうハ日常細字細品を眼ハ近ばけ視る人ハ近視眼とあり獵夫舟人ハ遠方の物を眺るの習あれぞ

遠視眼とあるも此理合
ありされば日常注意して
児童の翫物書あどを視
るとさい餘り近うらば
又餘り遠うらば適度處
ありて視さるる様ふ慣せ
ざ」○又眼の明しく健
康あらむふを毎朝清水
ふて可及的摩擦ぎる様

ふ」手柔ふ洗淨ざ」旦何時ふても眼脂の眼縁
ふ堆積るとい速ふ取除くざ」塩水を含て
甚ぎ害をあるものあり○その他五官何も清
潔ふもるい第一の養生ありその中耳を冷さき
水を以てよく洗淨め又時々剔耳籤を以て剔り
淨むざ」

啓蒙養生訓巻之五 大尾

青松學舍藏板

東京 馬喰町二丁目 嶋村利助

書肆 日本橋通一軒店 鈴木喜右衛門